



志友会報

802-0985 北九州市小倉南区志井6丁目11-13
(株)網武出版 093(962)7740 FAX093(961)8224
Eメール: saigo@skyblue.ocn.ne.jp

本紙の年間購読は本体3,000円+税です。

合気語録

(前回の続きより)そして精神が肉体を叱咤激励しても、肉体は精神を上回ることが出来ないのである。多くの肉體信奉者は、こうした落とし穴に全く気付いていないのである。

根性だけでは、如何とも為す術がない。一口に「根性」という。精神力の代名詞が、根性と云う言葉に置き換えられる。

しかしスポーツ関係者の発する根性ほど、欺瞞に満ちた言葉はない。

根性とは、一般にその人の根本的な性質や「こころね」「しょうね」などを現す。果たしてこの根性だけで、何とかなるものなのだろうか。

こうした根性だけで立ち向かうことを精神主義という。一切の科学的根拠を無視し、人間の精神力を決定的要因と考える立場を貫いて、劣勢を優勢に置き換えるというものである。しかし戦闘が死闘に展開した場合、この思考は自己矛盾を生むものである。

ではその自己矛盾とは何か。死闘を展開した場合、死ぬ覚悟と、こちらは一切傷つてはならないという二つの考え方は自己矛盾を生む。

死を覚悟して、俺も死ぬが、相手も殺すというのであれば、意識を集中して心・気・力の一致は可能であろう。ところが生還の望みの一ト欠片でも持ち、こちらは最大限に相手に被害を与え、しかも一切の傷を受けず、無傷で勝ちを修めるといふ考え方に固執した場合、こうした命を賭して死闘する戦闘は往々にして敗れる場合が多い。またその両方の矛盾を抱え込んだ時、意識、無意識にかかわらず精神的には何らかの蠢動(蠢動)に足りないものが策動すること(蠢動)が生じる。

死の覚悟と生還の望みが同居する時、如何に達人といわれ、喧嘩

上手と称されるストリートファイターでも、これほど恐ろしいものはない。

必殺の一撃を加える時機に当たり、根性という代名詞を抜きにして、無念無想に己が意識を高め、自分も死ぬ覚悟に至れば命を賭して死闘するのであるから、弱者といえども、何らかの勝機は生まれよう。

しかし傷といはならぬ、生きて生還するなどの、ほんの一ト欠

片の意識でも持とうものなら、死の覚悟は崩れ、死闘において、決戦においてその勝機は己が手許より飛び去ってしまう。

心中に、かくも大きな矛盾を内包している、当代一流と謳われた必殺の尖先も大いに鈍るのである。

また両者の矛盾を内包したまま、根性という精神主義で押し通そうとした場合、結果は最悪になることを胆に命ずるべきである。

無傷で敵を捕えるという思想の大矛盾

演武中心主義で格闘展開する演武形式の武道には、先に述べた通

に敗北して、吾が希み叶わず、消えて行った不運な武将が如何に多かった事か……

人間社会は、その取り巻に、常に

立派に殺られて見せる、死んで見せるのである。こうした状況下で、無傷で敵を生け捕るといふ思想は成り立つが、現実にはこうしたことは絶対にありえない。あくまで図上演習の世界であるから

だ。こうした大きな矛盾を抱えながら、演武という図上演習は死闘を演ずる決戦主義と、掠り傷すら負う事がない、保全主義の両方が成り立つのである。またここが図上演習と実戦の違いである。

太平洋戦争の敗北の一因は、こうした図上演習と実戦の違いを知らなかった、当時の軍人の愚かさ

が招いた結果が生じたものである。これは人生における人間社会の力学構造である。

であるならば、本質を見抜き、これを理論的に分析し、実戦において役立つものに、自ら作り替える能力を養わねばならない。

特に智慧を巡らし、小が大に挑む場合、ある種の法則があり、その法則に叶った戦法を用いて行動を起こす事が肝腎である。これを無視した努力は、如何に熱心に推進し、多大な自己犠牲を払ったとしても、それはまさしく徒勞であり、労働多く、利少なしの、嘲笑の対象を免れない。人生の失敗はここにある。

弱肉強食の世界では、原則的に「大は小より強い」という事なのである。

合気戦闘理論 その一



イラスト/曾川 彰

大敵は外の敵より、内の敵

人生は戦いである。死ぬまで戦いである。一時も気を抜く事は出来ない。しかしこの戦いにおいて、単に努力すれば勝つというものではない。我武者羅に努力しても、勝つという場合は、実に稀である。多くは、志半ばで挫折する。

この事は、実力主義や下剋上主義によって、裸一貫、ゼロ同然のスタート地点から、一國の総大将、そして関白まで登り詰めた者が居た。豊臣秀吉である。

相手があり、裡側から敵が取り囲むものである。「出る杭は打たれる」の例え通り、少しでも頭角を表わし、浮上すると、仲間内から袋叩きの憂き目に合うのが、浮世の常である。

敵とは、むしろ外側に潜むものよりも、裡側に多く取り憑くものなのである。裡側から、引き摺り降ろしが始まり、裡側から崩壊するのである。

大兵力の戦闘理論 さて、現実社会には「大は小より強い」という大法則がある。これは何人たりとも、覆えす事が出来ない。これが十二分に理解できないと、幾ら努力しても、それは徒勞であり、こうした徒勞の中で、目指す方向や目的は見えてこないものである。

だが一方において、「秘伝」という古人の智慧が存在し、この智慧を用いて、「小能く大を制す」という現実がある事も、また事実である。この智慧の中には、「小を以て、大に勝つ工夫」が凝縮されている。これを熟知し、日々実践に専念すれば、幸運の女神は、こうした実践者に、あるいは微笑みを投げかけるかも知れない。

しかし現実問題として、恐怖に陥った人間の眼には、ピンチはチャンスである。ピンチはピンチは折角のチャンス到来に、これを困窮するピンチと錯覚したり、虞れを為して、慌てふためくような、無様な醜態では、いつまでも勝因は掴む事が出来ない。見掛けの恐怖に圧倒されて、自らの立案した戦法はうまく運ばないばかりか、下手をすると、逆効果を招いたり、ついには相手から葬り去られる憂き目を見なければならなくなるのである。

したがって、戦法を効果的に駆使するには、智慧を巡らせた「武略」という策略が必要である。この策略を用いれば、「小が大を呑む」という、大きな心理的効果を自ら掴む事が出来る。

人間相手の社会原理は、その背後に、必ずと言っていい程、人間としての心理が働いており、この心理を無視する事なく、効果的に独自の智慧で切り抜ける事が大切である。人間は、各々に独自の心が働く生き物であり、如何なる人間であろうとも、この心理的な働きを無視する事は出来ない。

さて、「武略」に迫った場合、一種の策略と置き換える事が出来るが、これは決して自らを偽り、敵を騙す事ではない。

人間社会の現実とは、凝視すると、確かに敵しい側面がある。しかしこの敵しさに、圧倒されてばかりいては、単に絶望感を抱き、最終的には自らが崩壊してしまう原因を作ってしまう事にもなり兼ねない。

策略は決して、自他共に「騙す行為」ではないのだ。

しかし現実問題として、恐怖に陥った人間の眼には、ピンチはチャンスである。ピンチはピンチは折角のチャンス到来に、これを困窮するピンチと錯覚したり、虞れを為して、慌てふためくような、無様な醜態では、いつまでも勝因は掴む事が出来ない。見掛けの恐怖に圧倒されて、自らの立案した戦法はうまく運ばないばかりか、下手をすると、逆効果を招いたり、ついには相手から葬り去られる憂き目を見なければならなくなるのである。

したがって、戦法を効果的に駆使するには、智慧を巡らせた「武略」という策略が必要である。この策略を用いれば、「小が大を呑む」という、大きな心理的効果を自ら掴む事が出来る。

西郷派大東流合気武術総本部

春季近畿関西講習会

平成16年3月28日(日)午後1時~3時

講習会場: 大津市立皇子が丘体育館(小体育館)

JR湖西線・西大津駅下車(側道に沿って徒歩5分)

詳しくは下記のHome Pageを御覧下さい

<http://www.daitouryu.com>



イラスト/曾川 彰

講習会費用: 10,000円

指導内容:

宗家直伝による講習会。合気揚げを中心にした力貫・合気初伝から奥伝・合気柔術合気行法・食養野草の智慧・霊的食養道などの講話。

お問い合わせ: 総本部尚道館 093(962)7710(代)